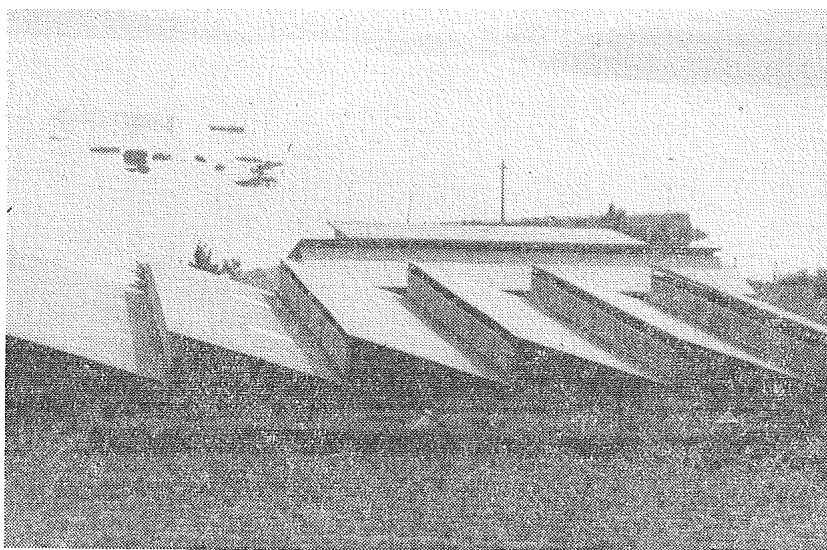


島に咲く養鶏 和気郡日生町頭島

事例紹介

戦後、日本の漁業はだんだんとふるわなくなってきた。特に、近海漁業、内海漁業の不振は深刻で、近頃は観光釣船などに切替えている漁師も多い。また大漁業会社が丘に登って養鶏部門に進出するなど、いろいろ方向転換している。本県でも大いに拡大されたが、1つ、島に養鶏団地が出現した。これは全国的に珍しいのでここに紹介する。



1、日生町の概況

岡山からバスで発って東に約1時間、観光と漁港の町、日生に着く。だんだんと発展してゆく国道2号線の沿線の風景、そして続いてあらわれる水田、ぶどう畑、もも畑の眺め、国鉄赤穂線に沿って南に下る山あいのけしき、片上の町中を過ぎてからは瀬戸内海の海岸沿いに走る窓からの眺望と、1時間という時間を感じさせない。

国立公園日生諸島の多島海美を眼前にした日生は、古くから漁港として発展した町である。今では昔日のにぎわいはないが、それでも午後4時頃から漁船が着いて水揚げが始まると、港全体が活気づいてくる。

日生町には、はやくから大阪方面の窯業会社が進出しており、また漁業関係から漁網の製造会社が設置されており、農家の兼業収入の道には恵まれた条件の町である。

農業部門における経営耕地面積は、日生町の総面積の約54%、236haである。農家総数600戸の1戸当たり平均経営規模は、水田23a、畑13a、樹園地3a、計39aである。いまこの町で作付られている作目は、水稲、小麦裸麦、甘藷、馬鈴薯等といろいろあるが今後、進展すると思われるものに、にわとり、豚、みかん、種馬鈴薯などがある。

2、頭島の地位

日生港を定期便を出て、約30分、5kmの沖合いに

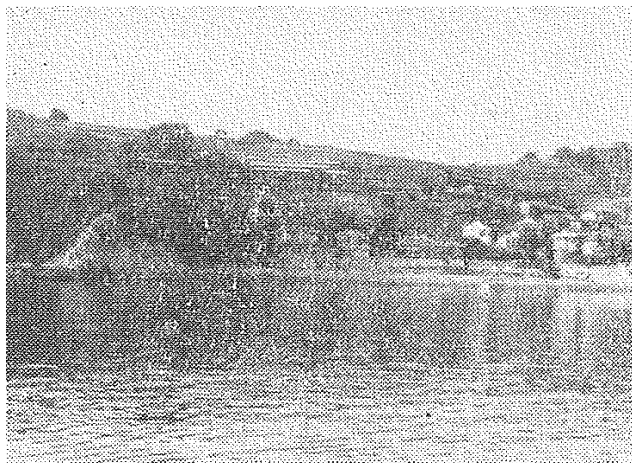
海を見降ろす双伸養鶏場の鶏舎

頭島が浮かんでいる。国立公園日生諸島の1つで、鹿の住む鹿久居島の西、海水浴場で名高い大多府島の北にある周囲4km、標高57mの小さな島である。もともと内海漁業の島であって、農家戸数160戸、1戸当りの平均耕地面積は水田0.2a、畑15a、樹園地0.3aの計15.5aとわずかであり、耕種による収入はほとんどないといってよい。従って、兼業化が進み、専業は160戸の農家のうち8戸で、若い者の大部分が本土町内の窯業会社等に通勤しており、ますますこの傾向は強くなっている。

3、頭島の養鶏

突如、島に養鶏団地が！

数年前より曲り角に來た農業を打開するために、



海から見える頭島の鶏舎

岡山畜産便り 1964.09

農業の構造改善事業各地で推進されているが、特に養鶏は養鶏生産物需要の増大とともに2、3年のうちに急激に発展して、岡山県下でもいたるところに新しい養鶏団地が造成されてきた。頭島もこの卵価高に刺激されて専業養鶏が一気に拡大された。と言ってしまうと何の変哲もないありふれた団地形成になってしまうが、現在、養鶏をやっている連中が2、3年前まで漁業で生計を立てていたと聞けば、オヤッと思うであろう。

内海漁業でにぎわっていたこの頭島も戦後だんだんと振わなくなってきた。そして遂に昭和35、6年の極度の不振を機会に、多くの漁師は機帆船に切替えなくてはならない事態を招いてしまった。しかしこれには多額の費用が要るし、またこれからの発展性があるものかどうか分からないことから、丘にあがる注意とした海の男達もあった。頭島の専用養鶏はこの人達を中心として発展拡大されてきたのである。

さて丘に残って何をするとんでも耕地面積は小さく耕種農業ではとてもやってゆけない。頭島は瀬戸内の島であるため、日照、通風が極めてよく冬温かく夏涼しいと言う気象条件に恵まれた土地である。この良さを生かして養鶏を取入れることを思いついたのである。しかし運搬は全く海上輸送に頼らなければならない点、小島であるため道路が整備されておらず、また急斜面が多く、人力のみに頼らなければならない点などの不便さも数多くある。

農協すう場を中心に！

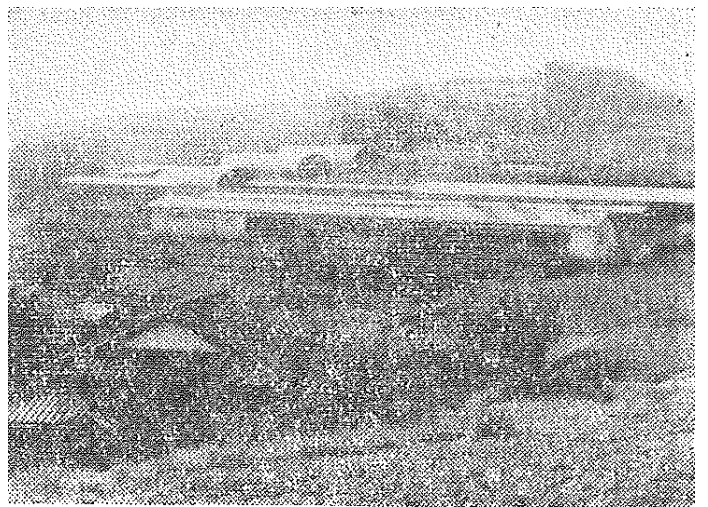
始まり当初は資金の借入れを個人個人で農協あるいは日生町の信用組合から借入れ、生産物の出荷も個々ばらばらで、農協から資金を借りたものは農協へ、信用組合から借りたものは信用組合へと出荷していた。しかしこんな状態では進歩も発展もあるものではないし、また養鶏農家の結束も強くないので昭和35年に14戸の養鶏農家からなる養鶏組合が結成された。この音頭をとったのは日生町農協であった。農協としても、昭和35年は農山漁村振興事業の最終年度に当るのを機会に、頭島の養鶏を伸ばしてゆく方針をうちたて、まず育すうの完全からということで農協経営の共同育すう場を建設すること

から養鶏団地造成のスタートを切った。先ず、120日ビナまでに農協が育すうして、個人に1羽500円で貸付ける方法をとったのである。

さらに昭和36年には個人が不完全な育すう施設をもつことがかえって収益をあげ得ないという判断で、この共同育すうを全利用できる施設にするために、またこの育すう場を中心にして養鶏農家の協力精神をもちたてるために個人の育すう施設を取除くことにし、取り壊すか成養舎への切替を行った。育すう施設をもたない養鶏家というめずらしい形であるが、共同育すう場を中心に結束を固める方針をとったのは先見である。

現在のところ養鶏農家は14戸で、1戸当り平均飼育羽数1,500羽、合計21,000羽、鶏卵年間17万kgを生産している。

このように養鶏農家は全総力を養鶏1本にうちこんでいるため、自己資金の7～8倍の負債を負っている。近代化資金などのほかに、飼料会社からも相当の資金を借り入れている経営は決して楽ではない。なれない技術、運搬は本土の養鶏より余分にかかる経費、気象には恵まれても島という条件からくる宿命的土地基盤の不完備等々数えればきりが無い。しかしこのむづかしさを乗切るバックボーンは代々海できたえられてきた男のド根性である。このクソ魂はかならずこの島を養鶏団地として育て上げるであろう。



円型鶏舎と手前の共同育すう場

4、頭島の代表的農家

ところで、頭島の養鶏農家の中でもっとも代表的農家といえる双伸（そうしん）養鶏場を紹介しよう。

岡山畜産便り 1964.09

(写真参照)

2人の協業経営で38年度より150坪の鉄骨鶏舎を建てて始まったが、現在では1人は忙繁時の手伝い、また助言を与える程度で、あとは29才の青年森谷定光氏が3,200羽の成鶏を管理経営している。その38年度収支の概算は第1表のとおりである。

森谷氏は養鶏経験年数はまだ3年であるが、私設のトロッコを造り、約15mの崖下から鶏舎までの運搬をするなどの工夫を凝らし、なかなかのやり手である。しかし、崖の上の土地はこれ以上開くことができない。また1人の管理では今の3,000羽が手一っぱいの羽数である。

5、今後の抱負

5年後に10万羽の団地を

頭島の農業としては、耕種部門はこれからのちも期待できるころはなく、やはり養鶏を中心に規模の拡大を図り、収入をふやすのが一番よいとみられる。農協でもその方針を樹てており、今後の指針を得るために、今年度は岡山県畜産会の実施している畜産経営コンサルタント事業の診断をうけることにした。5年後に10万羽の団地を造成して、鶏卵年間80万kgの生産を目標にしている。現状と目標を表にしたのが第2表である。

今の14戸の養鶏家が基礎を強くして1戸あたり1万羽飼養農家となって、頭島全体で10万羽となるのが地元としても農協としても最大の念願である。しかし、増羽するにしても、ネコもシャクシモとどんどんやったのでは破綻が早く来やすいものである。そこで14戸のうちのすぐれたものを中心にして狭く深くおしすすめていく計画である。

しかし、個人経営のみで10万羽の団地を造り上げることは容易なことではない。やはり協業も育成し

第1表 双伸養鶏場昭和38年度収支概算 (単位千円)

収			入				支						差引粗 収入額	
鶏卵	産鶏	鶏糞	年度末 在鶏 評価	年度末 飼料 等 評価	その他	計	飼料費	ヒナ 購入費	衛生費	諸材料費	鶏舎等 償却費	その他		計
4963	353	83	1709	220	48	7376	3889	2476	63	121	106	372	7027	349

第2表 頭島の拡大計画

区	分	成 鶏	共同育すう	鶏 卵	廃 鶏	鶏 糞
現	在	20,000羽	22,000羽	170,000kg	13,000羽	300,000kg
将	来	100,000	100,000	800,000	40,000	1,000,000

てゆかなければならないが、一番の問題となるのはどこも同じように資金の調達である。日生町の農協では、今までのような農家が資金持寄りというような協業でなく、資金を外部から導入して、つまり飼料会社、種鶏園、養鶏に興味をもっている人などが出資者となり、これを地元が労力を出して経営してゆく方法、また資金を蓄積した個人経営者が金を出しあって、労力を雇って経営させる方法など、いままでに見られなかった協業の案を計画している。これが成功すれば、まったく新しい協業例となろう。

このように頭島は新しい産地であってここ2、3年の高卵価に刺戟されて急激に増羽してきたところである関係で、古い時代の養鶏の影響を受けておらず、新しい飼養技術を農協の指導でどしどし吸収しようとしている。鶏舎の造りなど申し分のないものであり、にわとりも外国種が殆んどを占めている。

現在あちらこちらで見られる円形平飼い鶏舎を試験的に取入れている農家もあり、このように自分からすすんでいこうとする意欲が農家全体に見られる。

6、頭島の問題点

このようにしっかりした計画のもとに順調に伸びつつある頭島の養鶏も10万羽の団地造成となると種々問題がある。全体的にみられるものを列記してみると

- 1、道路が整備されていない点
- 2、基盤整備の点から構造改善事業が受けられるかどうか
- 3、島内で十分労働力がまかなえるか
- 4、10万羽以上になった場合、用水をどうするか
- 6、共同撰卵場、廃鶏の共同処理場の点
- 7、農協の共同育すう場の拡大
- 8、後継者の育成をどうするか

以上のようななどの地域にもみられる点のほかに、離島であるがゆえの条件がいろいろまだある。しかし、これれの問題点も農協を中心に、海で鍛えた男達の根性で切開いてゆくことだろう。